

2024年4月総評 暮田真名

比較的歩きたくない千歳飴

/ 太代祐一

納得感がある。この納得感はどこからくるのか考えてみると、「足が棒になる」という慣用句があるからではないだろうか。千歳飴は見ればわかるとおり棒だし、見た目も大きさも骨に似ている。「千歳飴」の幹旋が巧み。

熱出てもたのしい歳だ

家中のコップに口付けして

まわる夜

/ 雲理そら

風邪をひいた人は他の人と同じ食器を使わないものなので、「家中のコップに口付けしてまわる」のはかなりの迷惑行為である。一人暮らしの可能性もあるし、友人や恋人と同居している可能性もあるが、この歌の主体は子どもで、家族と一緒に住んでいるのではないかと、上句の印象から思う。発熱が「仕事や学業の妨げ」に直結せず、なにか非日常的な催しのよう感じられる幸福な子ども時代のようなものをこの歌から受け取ることができる。

やっぱり夢みたいなんだ、

頬が千切れて顔が歪むといいなあ

/ 羊夏生

夢のようなできごとが起きたとき、頬をつねって痛ければ夢じゃない……という定型的な表現がある。それを念頭に置いたとしても「頬が千切れて顔が歪む」というのはなにかただごとではない雰囲気がある。よほど夢であってほしいような、悪夢のようなできごとだったのかもしれない。

真鍮の葉

窓から射し込んで

わたし

わたしの続きのわたし

/ 永山逢海

四角い窓枠から射し込む黄銅色の日差し。それを「真鍮の栞」と表現したことに驚きがある。本のページをめくるように「わたし」はあたらしくなっていく。緊張感のある言葉選びが歌に清冽さを与えている。

白菊を挿すほどに瓶括れゆく

/ 福山ろか

「白菊」と「瓶」の存在感が拮抗する、激しい句。「瓶が括れる」というのは現実には起こり得ない景だが、白菊を挿された瓶が痛みにも身を振っているかのようなリアリティがある。戦いのなかにある官能性。

わらびもち泣きつつなみだ

食って寝る

/ 宮崎莉々香

頭から順番に読んでいくと、どうしてもわらびもちが泣いていることになる。本当は「泣きながらわらびもちを食べ、寝る」ということなのだと思うけど、文章の上では主語の位置からわらびもちが退くことはない（わらびもちが泣き、涙を食べ、寝てる）。文字のなかで透明になる「わたし」と透明なぶよぶよである「わらびもち」が一体化するような読み味がクセになる。

感情を四つにわけて話すとき

わたしの舌の根にある砂漠

/ 羽水蘭

誰かにわかってもらうために話しているのだろう。上の句からは可能な限り理性的に話し合いを進めようとする主体の姿が想像できる。しかし、主体は同時に「砂漠」を感じている。からからに乾いた不毛の土地。「自分の感情を言葉にして伝えることは豊かなことである」というのは一面的には真理だが、それだけではない。コミュニケーションの苦々しさを逃げずに描写する筆力を好ましく感じた。

歯ブラシを買って夜桜持ち帰る

/ 音無早矢

「買う」と「持ち帰る」という動詞の距離感が絶妙。歯を磨くのに使う、お金を払わないと手に入らない「歯ブラシ」と、特に何に使えるというわけでもないけどきれいで、持ち帰ることもできる（？）「夜桜（の枝）」。同じ棒状でありながらまったく違う二つのものを対比させたところもユーモラス。

先ほど夜明けに喻えたカップ洗う

/ 小里京子

カップの色が夜明けの空に似た紺色なのかもしれない。しかしそのように書いたのではまったくだめで、「先ほど夜明けに喻えた」と書くからこそ夜明けの空そのものをひょいと手に取って洗っているかのような錯覚が生まれる。こういう錯覚ばかりを見ていたい。

死んだ母親の名前を書く

よく懸賞あたる

田村と松野

/ 和泉次郎

死んだ母親の名前を書くということは、母恋いなのだろうか。しかし、それが「懸賞」に及んでいるとなるとやや不謹慎なのではないか？という気がしてくる。しかも「よく」ということは常習犯だ。変なことが登場人物の紹介調に書かれていておもしろい。